

◆ 港都税事務所長賞 ◆

「望む社会を考える」

八丈町立三原中学校 3年 峯元 絆

私は、税理士さんによる税金の授業を通して、税金が社会の中で大きな役割を果たしていることを学びました。税金の授業の中で一番印象に残っていることは、「大きな政府」と「小さな政府」についてです。

大きな政府とは、政府が経済活動に積極的に関わり、国民の生活を安定させるという考えです。高い水準の公的サービスをするために、税などの国民負担が大きくなるのが特徴です。一方、小さな政府は、政府が自由競争を促し、経済成長を図るという考えです。税などの国民負担は軽い分、公的サービスの水準も低く、その社会では「自分のことは自分で」という自助努力が求められます。

この二つの政府のどちらがいいかは簡単に決められません。それぞれの国の社会状況や文化、価値観が違うからです。どちらを選ぶかは、最終的に国民がどのような生活を望むのかによって決まるのだと思います。

私は最初、日本では税負担について不満をもっている人が多い印象だったので、税負担の少ない小さな政府のほうがいいと思いました。しかし、日本の社会が税金で支えられていることを知り、税金が少なくなってもこれまでの生活は維持されるのか、警察や消防などの公共サービスは保たれるのか、お金がないという理由で高校や大学に進学する人が減るのではないかと考えるようになりました。

ですが、税金が高くなると国民の負担がさらに増え、不満が募る可能性があります。この点について、大きな政府の代表例であるスウェーデンを調べてみると、スウェーデンでは税負担が大きいにも関わらず、国民が高い満足感を示していることがわかりました。二十歳まで医療費は無料、高校・大学の学費は無料、手厚い児童手当や育児休業の保障など税金がしっかりと公共サービスに還元され、自分たちの生活が維持されていると一人一人が実感しているのです。

日本で税金に不満があるのは、払った分が国民に十分返ってきているのを感じられないからだとは私は考えます。払った税金がどのように使われているかがわかりにくい場合、不公平感が生まれてしまいますが、税金が高くても、その税金が十分に役立っていると感じられれば税金に不満を持つ人も減っていくのだと思いました。

税金の授業を通して、税金がどのように使われているかを知ることが、その意義を理解するために重要だと感じました。また、政治について考える機会を増やし、国を良くしていくことにつながるのだと思いました。

これから大人になり、税金と関わる機会が増えると思います。社会の一員として、自分がどのような社会を望むのかしっかり考え、より良い社会を作るために積極的に貢献していきたいです。